

楽聖ドビュッシー

小松 耕輔 著

(新字新仮名)

フュゼ

目 次

序	7
その生涯	11
第一章 少年時代—音楽学校時代	13
第二章 羅馬留学時代	29
第三章 巴里の生活	45
第四章 大戦以降—その晩年	87
その藝術	95
第一章 初期の作品	97
第二章 《ペレアス》以前の作品	105
第三章 《ペレアスとメリザンド》.....	117
第四章 室内楽的作品及び《海》.....	127
第五章 《子供の領分》オーケストラのための《影像》 その他	139
第六章 《前奏曲》とメロディー	149
第七章 《聖セバスティアンの殉教》その他	157
第八章 《遊戯》《玩具箱》《十二の練習曲》 三つの奏鳴曲	161
付録	169
作品目録	171
音楽評論目録	181
人名索引	187
底本と校正について	199

序

西洋音楽史上に於て独逸音楽が最も盛観を呈したのは十八、十九の兩世紀に於てであった。此の間、バッハ、ヘンデル、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、ヴァーグナーと、次次に偉大なる作曲家を楽壇に送って独逸音楽は世界を風靡したのである。

然るに一八七一年に及んで仏蘭西に「国民音楽協会」なるものが組織せられて、専ら自国の国民的音楽の創作を奨励するに至った。その目的のために主として尽力したのはサン＝サーンス、ビュッセル、セザール・フランク、ヴァンサン・ダンディ等の人人であった。

此の運動に刺激せられてフランスの音楽家等は競うて国民的音楽を創作し、世界楽壇に華華しく進出するに至ったのである。

しかし決定的にフランス音楽を世界的ならしめ、これを二十世紀楽壇の王座に着けしめたものはクロード・ドビュッシーであった。

彼は一八六二年八月、巴里に近きサンジェルマンに生まれ、巴里国立音楽学校に入学し、遂に羅馬大賞を贏ち得て羅馬に留学し、極めて革新的な音楽を書いて世人を驚かした。

ドビュッシーが、彼独自の音楽を創始するに当たって、外界から最も深い感化を受けたのは疑いもなく象徴派の詩と、印象派の絵画よりである。彼は詩人マラルメの家で催された詩人や画家の会合に根気よく出席した。そして益々浪漫派の

手法に対して不満を感じ出した。彼は一つのテーマから、或時には殆ど無意味な飴細工式方法を用いて楽句を引きのばしてゆく作曲法を嫌った。そしていたずらに感情を誇張し、情緒に色づける方法を嫌った。彼は必要以上に音を強めたり、管弦楽を膨大にする浪漫派の手法を最も排斥すべきものと考えたのである。

彼は智力的努力で系統的に組み立てられた浪漫派の詩より、ヴェルレーヌ一派のように感覚と、情緒と、意匠との一致より生じた象徴派の詩を喜んだ。その結果として当然彼はマラルメ、ヴェルレーヌ、ボードレール、レニエ等の大なる感化を受けた。

又絵画の方ではモネ、ルノワール、ピサロ等の印象派の画家より感化を受けた。これらの画家は線よりも色彩に深い興味を感じていたのである。

ドビュッシーはこれらの画家が、線よりも色彩を愛したと同じく、メロディーよりもハーモニーに興味を感じた。そして旋律を通して結ばれた和音の帯のかわりに、異なりたる種類の和音を、恰も単色を画布の上に並置する印象派画家の手法の如くに並置した。在来の和声学に於ては協和和音と不協和和音を区別して両者の結合に対して厳格なる法則が存在する。然るに彼は必要に応じてあらゆる和音を同一に見做して使用した。

如^{かくのごとき}斯革新的な音楽が、同時代の人人に批難攻撃されたことは当然のことと云わなければならぬ。しかし間もなく彼の真価は一般の認めるところとなり、追いついて彼の音楽は国境を越えて世界のあらゆる国に受け容れらるに至った。今日いやすくも音楽会の在るところ、彼の名をそのプログラムの中に見出さぬ処はあるまい。かくしてドビュッシーの歿したのは一九一八年の春であった。

彼はあらゆる点に於て現代フランス派の中心をなしておる。





それのみならず、今日世界のあらゆる新進作曲家にして彼の感化を受けぬものは無いといっても差支えあるまい。彼の音楽は今や決定的に世界を征服しているということが出来よう。

この小著を著すに当たって著者は次の諸書を参考した。此処に列記して厚く謝意を表したいと思う。

Claude Debussy et son temps. —Léon Vallas.

La vie de Claude Debussy. —Jean Lépine.

Debussy. —Charles Kœchlin.

Claude Debussy et son œuvre. —Daniel Chennevière.

Debussy. —André Suarès.

Claude Debussy. —René Peter.

Les Idées de Claude Debussy. —Léon Vallas.

Debussy. —La Revue Musicale numéro spécial.

La jeunesse de Claude Debussy. —Numéro Spécial de la Revue Musicale.

尚以上の諸書の中、多くのものを中山貞一郎君より借覧し得たことを、併せ録^{しる}して感謝の意を表するものである。

昭和十三年五月

阿佐ヶ谷の草堂に於て

小 松 耕 輔

その生涯

第一章 少年時代—音楽学校時代

クロード＝アシル・ドビュッシー Claude-Achille Debussy は一八六二年八月二十二日、イール・ド・フランスのサンジェルマン〔校註: Saint-Germain-en-Laye〕に生まれた。彼の父はマニユエル＝アシル・ドビュッシーといって、セーヌ県のモンルージュの生れであり、母はヴィクトリーヌ＝ジョゼフィーヌ・マヌーリといって巴里^{パリ}の生れであった。二人は一八六一年十一月三十日、巴里^{パリ}の郊外なるルヴァロア村で結婚すると、直ちにサンジェルマンにやって来て、パン街三十八番地にささやかな陶器店を開いた。そして一八六二年から六四年まで、この地で商売に従事したのである。

夫婦の間には全部で五人の子供が生まれたが、そのうちサンジェルマンで生まれたのは上の二人だけである。長子がアシル・クロードで、アデル、エマニユエル、アルフレッド、ウジェーヌの四人が、その後に生まれたのである。然し兄弟姉妹の縁は薄かった。というのは、母親が余り子供好きではなかったので、両親の手許で育てられたのは長男のアシルだけで、その外の子供達は伯母のルースタン夫人〔校註: クレマンティーヌ〕の所へ預けられてしまったからである。

ところで商売の方は余り思わしくなかったので、アシルの両親は、一八六四年七月三十一日にアシルの洗礼を済ましてから間もなく、店を畳んでサンジェルマンを引き上げた。初めクリシーに住んだが、やがて巴里に移って、ピガール街に居を定め

た。そして色々奔走した挙句、父親はファイヴ・リール商会の会計掛りに雇われることになった。住居もピガール街からクラペロン街十三番地に移された。

一体にドビュッシーの幼年時代少年時代は、余り幸福なものではなかったようである。ドビュッシー自身自分の子供の頃の思い出を人に語ったことは一度もなかったが、それは恐らくその思い出が、彼にとって快いものではなかったためでもあったろうかと思われる。兄弟姉妹たちと分かれて、一人親許に残ったアシルは、母親から読み書きや算術などを一通り教わったのであるが、それはほんの一通りの極不完全な初等教育に過ぎなかった。しかも十一歳で音楽学校に入学するまでは、アシルの受けた教育は、母親のこうした教育だけだったというのが本当らしい。このことはアシルを長い間苦しめる因^{ちな}みとなった。彼が二十歳の頃書いた手紙の中にさえも、綴りの誤りや文体上の欠陥が見出される位で、大人になってから色々読書したり、文学者の仲間と屢々^{しばしば}往来したりすることによって、彼はやっと一人前になれたのだった。後でも述べるが、ドビュッシーが文学者仲間から学んだものは非常に沢山あり、殊にこの点に彼に寄与する所多かったのは、有名な文士のピエール・ルイスであった。

序でにいえば、ドビュッシーの父親や親戚の者たちを初め、ドビュッシー自身さえも、屢々自分の姓をde Bussyという風に綴^つって、自分の家系が貴族の出である風に装^{しか}っているが、然しこれは単なる綴字法上の戯れで、彼の血液には少しも貴族の血は混じっていない。彼の先祖は純粹の仏蘭西人でこそあれ、いづれも職人だの、工匠^{こうしやう}だの、農夫だのといった、極身分の低い人人でしかなかったのである。

さて貧しい家庭に比較的無頓着に育てられて行った幼いアシルの上には、別にこれといった特別な出来事はなかった。両親は何ということもなしに、彼を将来海員にしようと考えていた。勿論彼の幼年時代も、すべての仏蘭西の子供たちがそうである

ように、街の人人の歌う俗曲を絶えず耳にし、子供たちのやる輪舞に入って遊び戯れることなどで、明け暮れて行った。この外の真面目な音楽といえば、巴里の広場や公園などで演奏される、軍楽隊や市民音楽隊の奏楽があるくらいのものであった。

尤も父親は音楽が好きで、兄弟の一人が田舎でオーケストラ指揮者をしているくらいだったので、アシルが少し大きくなると、父親は彼を時々劇場へ連れて行った。そこでアシルは例えば「トルヴェール」[校註:Trouvère (仏)]のようなオペラを聴いて、非常に感動させられたのであった。これによっても、アシルが幼い時から並ならぬ音楽的趣味を持っていたことは解るが、然し幼いアシルが一番心を奪われていたのは、音楽よりも寧ろ絵であった。彼は自分が採集した蝶の華やかな色彩や自分の部屋を飾ってある綺麗な床飾りだの風景画だのが大好きであった。だから彼は初めは画家になりたいとさえ思ったくらいであった。

彼が初めてピアノを習ったのは九歳の時である。先に述べた伯母のルースタン夫人は、カンヌに住んでいたので、アシルも時々そこへ行ったが、子供の好きなルースタン夫人は、幼いアシルの才能に目をつけて、彼をチェルッティという年老った伊太利人の先生につかせた。尤もこの先生についてピアノの手解きを受けたのは、僅か数週間に過ぎず、そして先生の方では、少年の著しい音楽的天分などには、てんで気がつかなかったらしいが、それ以来ピアノは、アシルにとって忘るべからざるものとなった。再び巴里のクラペーロン街へ帰ると、彼は始終紫香木の古ピアノに向かって、勝手なメロディーや和音を弾いて楽しんだのである。

この頃のアシルは、かなり普通の子供たちとは違っていた。無口で、絶えずじっと何か考え込んでいる様子で、勉強も遊戯も好かなかった。大変賢いけれども、何だか陰気臭い、得体の知れないような子供だった。遊び相手もなく、独りぼっちで家の中に引き込んで、聞き覚えた歌や曲などを、ピアノで弾いて

喜んでいるのであった。

ある日のこと、アシルがそうして勝手にピアノを弾いているのを聞いたのが、嘗てショパンに教わったことのあるモート・ド・フルールヴィル夫人だった。夫人は幼いアシルの中に、確かに偉れた音楽的天分があることを感じた。で余り気の進まない父親を説き伏せて、無報酬でアシルにピアノを教えることにした。夫人は優秀な教師で、自分が嘗てショパンから学んだものを、誤りなく伝えることが出来た。だから夫人の教育は、幼いアシルにとって終生忘るべからざるものとなった。アシルの進歩は驚く程速やかだった。それから僅か数ヶ月にして、彼は立派に巴里音楽学校の入学試験が受けられる迄上達したのである。

一八七三年十一月、アシルは十一歳にして音楽学校に入学を許可された。そしてソルフージュとピアノのクラスで学ぶことになった。同級生の想い出によると、この時のアシルは背の底い、ずんぐりと肥った少年で、態度は内気でぎごちなく、服は粗末で、まるで小さなボヘミアンのような印象を与えた。頭は長く、額は狭く突き出していて、赤い総のついた水夫帽を冠っていた。この水夫帽は、少年が長い間離さなかったものであった。

アシルの父親は、今ではもう息子を海員にしようという考えをすっかり棄ててしまった。そして彼を立派な名演奏家にしようと考えた。で父親は息子を嚴重に監督して、日に六時間乃至八時間も勉強させた。母親の方でも負けてはいなかった。音楽の勉強と一緒に、学問の勉強も怠けさせなかった。アシルの方でも学問の勉強が足りないことを感じて、そのために辞書を読むことで力をつけようとした。

こうした生活は、僅か十一になったばかりの少年にとっては、かなり辛いものであったに相違ない。うんと勉強させられるだけで、甘やかされることは愚か、優しい愛情に暖かく抱かれることも少なかった。だからこの頃のアシルは、決して幸福だ

ったということは出来ないだろう。

音楽学校では、ソルフェージュの先生は極若いアルベール・ラヴィニャックだった。彼はアシル・ドビュッシーの中に、異常な感受性を発見して、快い驚異を感じた。そしてその後の三年間というもの、アシルに深い注意を払った。よく学課の済んだ後で、アシル一人残して、沢山の立派な音楽を知らせたり、味わわせたりした。この理解ある若き教師の指導は、アシルにとって非常に有り難いことであつた。彼は良き学生として、沢山の賞与を次々に獲得した。一八七四年夏の最初のコンクールには、ソルフェージュの第三賞牌を、一八七五年には第二賞牌を、一八七六年には第一賞牌を授与された。

アシルがピアノの上級に入ったのは、一八七五年秋のことである。然しここではソルフェージュのクラスに於ける程工合ぐあいよくは行かなかつた。一八一六年生れの年老いたマルモンテルは、練達した教育家ではあつたが、かなり専制的で、学生の自由精神などというものはてんで認めなかつた。だから生れつき独立どくりつ不羈ふしな精神を持つアシルとの間がうまく行かなかつたのは、寧ろ当然であつたろう。それに勉強家であるべく余りに多くの才能を持っていたアシルは、一生懸命に名演奏家になる勉強をすることを、どうも好まなかつた。それよりも彼は、クラシックやロマンティックの名曲を読むのが好きだつた。バッハ、モーツァルト、ショパン、ハイドン、シューマン、ステファン・ヘラー、アルカンなどが、アシルの特に愛した巨匠たちであつた。マルモンテルはこうしたアシルの不規則な即興曲や幻想曲に、度々悩まされもしたが、また興味を持たされもした。ある時彼はその奇妙な学生について次のようにいった。「彼は少しもピアノを愛していないが、然し音楽は非常に愛している」。この言葉の後半は正しいにしても、前半が正しくないことはいうまでもない。要するにこれは保守的な老教師が、アシルの大胆なピアノの試みに当惑させられて発した嘆声たんせいに外ならない。

こうしてマルモンテルは、兎に角アシルの類稀たぐいまれな特質やオリ

ジナリティには決して盲目ではなかったが、校長のアンプロウズ・トーマは全然アシルを好かなかった。例えば試験の時、アシルはバッハの前奏曲と遁走曲〔校註：プレリュードとフーガ〕を弾いたが、この場合にアシルが示した著しい表情的探求を、トーマはどうしても我慢が出来なかった。何故ならこの扱い難い校長にとっては、当時の沢山の音楽家にとってと同様、《平均律ピアノ曲》は多音的練習曲以外のものではなかったからである。

この当時のアシル・ドビュッシーについて、彼とピアノ科の同級生であったガブリエル・ピエルネは次のように語っている。

「マルモンテルのクラスで、彼はその奇怪な演奏でもって我を驚かした。生れつきのぎごちなさのせいか、それとも内気さのせいかは知らないが、彼は文字通りピアノに飛び掛かって、そこからあらゆる効果を引っ張り出した。まるで彼はピアノに対して強い怒りでも感じているように、衝動的な身振りで荒っぽくそれを取扱ったり、難曲を弾きながら激しく喘^{あえ}いだりした。然しこうした欠陥は段段弱まって行き、時には驚くほど甘柔な効果を出すこともあった。色色な欠陥や特徴があるので、彼の演奏は何としても非常に特異なものには相違なかった……………」

またポール・ヴィダルは、これよりも少し後の一八七八年にアシルを知ったのであるが、彼の印象によれば、アシルは黒い縮れ毛を額に垂れ下がらせ、熱烈な眼つきをし、思いつめた猛烈な表情を持ち、「何かこう野蛮なところ」があった。ピアニストとしての才能については、次のようにいっている。

「彼の演奏は非常に興味あるものではあったが、ピアノ的には色色欠点がない訳ではなかった。顫音^{トリル}〔校註：trille（仏）せんおん〕の演奏は難儀そうであったが、これに引き換えて、

左手は異常に巧みで大きく拡がる事が出来た。彼のピアニストとしての才能は、バジルの伴奏科に入るに及んで現れ、そこで彼は著しく同輩^{ぬき}を抽^ひでることが出来た」

一八七四年の七月、アシルはピアノの上級科に入ってから初めて、校長アンブロワーズ・トーマを委員長とする審査員の前で、ピアノの試験を受けることになった。この時彼はやっと十二歳で、音楽学校入学以来やっと八ヶ月を過ごしたばかりであった。課題はショパンの第二番協奏曲へ短長であったが、少年アシルは美事に試験を通過し、第二褒章を授与された。翌一八七五年のコンクールには、ショパンの第二番譚詩曲が出されたが、この時はアシルは第一褒章を獲得した。この時の彼に対する批評は大変なもので、「十二歳の天才少年」だの、「将来異常な名演奏家たるべき少年」だの、「十二歳の少年にして将来の第一流名演奏家……」だのといった言葉が、多くの批評家の口から洩らされた。

然しその後一八七六年から七九年に到るまでのアシルの成績は、引き続いて余り^{かんば}香^かしいものではなかった。漸く第二褒章^{ようや}までは貰えても、第一褒章には全然手が届かなかったのみならず、まるで賞与に入らない年もあった。そこでアシルを名演奏家に仕上げ、演奏旅行で儲けようと考えていた父親も、到頭^{とうとう}その希望を抛^{なげ}たざるをえなくなってしまったのであった。これは要するに、上に述べたようなピアノ的欠陥がアシルにあって、それが審査員の気に入らなかったためであったろうが、その根本の原因は、アシルに名演奏家になろうとする野心がなかったことにあったらしい。色色の欠陥に気づいていても、アシルはそれを征服しようとは思わなかった。そんな機械的な技巧の練習に熱中するよりも新しい音響の探求の方が、どれほど面白かったか知れなかったのである。そんなことからして、アシルはピアノ科では決して良き学生とは見えなかった。

このことはエミール・デュランの和声科に入ってからと同様

であった。オリジナルな学生も余りにも厳格すぎる教師との間には、和声的方法についての一二の見解の相違から、殆ど毎週のように意見の衝突が持ち上がった。わけても教師を焦立たせたのは、アシルが和声学の宿題で盛んに間違いをやらかすばかりでなく、ピアノに向かつては、音楽学校で正式に認められていない不規則で野蛮な和弦〔校註:和音〕を、臆面もなく弾きまくることだった。最初エミール・デュランは、アシルのこうした狂気沙汰をととても我慢が出来なかったが、然しそのうちには段段アシルの良さが分かってきた。これについて当時の学生だったアントワヌ・バネスは次のように語っている。

「学課が終わる頃、我我一同の宿題を丹念に調べた後、彼は食通らしい熱心ささえ見せながら、若いクロードの宿題の訂正に手間取った。厳しい批評と荒荒しい訂正の鉛筆が、クロードの頭や手帖の上に雨と降りかかった。然しそうしたことが済むと、先生はまた落着きを取り戻して、残酷に斬りさいなまれた頁を黙ってもう一度読み返した。そして謎のような微笑を浮かべながら、小声でこう結論した。『明らかにこれは正統のものではない。然し大変巧みには書かれている』」

アシルは和声学のコンクールでは、一度も褒章にありつくことは出来なかったが、然し和声学に興味を持たなかったのではなかった。学課が済んでから、同級生や下級生たちのために、非常に自由なやり方ではあったが、宿題を即興作曲してやったり、低音部や上声部〔校註:chant (仏)〕を書いてやったりすることが屢々あった。勿論そんな場合でも、彼は和声学の法則や厳格なスタイルのことは、大して念頭に置きはしなかった。

アシルはまたオルガンも一生懸命に勉強しようと思った。当時のオルガンの先生はセザール・フランクで、オルガンと一緒に即興作曲を教えていた。でアシルはオルガン科に入って、老フランクの教えを受けることになったが、それは長続きしなか

った。この理由は色々あるであろうし、事実またアシルはある程度までフランクを愛し、尊敬していたのであったが、然しフランクの甚だしい転調癖が、結局アシルを満足させなかったためのように思われる。それから数年後、ある機嫌の悪い日に、ドビュッシーはフランクのことを「転調機械」であるとさえている。

以上のような次第で、音楽学校に於けるアシル・ドビュッシーは、どちらかといえば不遇な学生でしかなかったが、然しここに意外な幸福が彼の上を訪れることになった。

一八七九年のピアノ科コンクールで失敗して間もなく、彼は先生のマルモンテルから、ナデージャ・フラレトヴナ・ド・メック夫人にピアニストとして推薦された。彼女は露西亜人の鉄道技師の夫人で、早くから未亡人であったが、財産は十分にあり、音楽に対して深い興味を持っていた。チャイコフスキーはずっと彼女の保護を受けていたのであった。このメック夫人はシュノンソー城で、若いピアニストとヴァイオリニストとチェリストを集めて、一つのトリオを作っていたが、アシル・ドビュッシーは友人のヒメネスに代わって、このトリオのピアノを受け持つことになったのである。彼はシュノンソー城で、色々の古典音楽や、チャイコフスキーの作品などを演奏し、また夫人の望みに応じて、即興作曲を試みたりなどした。夏になると、夫人は彼を伴って、フィレンツェ、ヴェニス、ウィーン等に遊び、それからモスクワまで行った。

ヴェニスでは彼はリヒャルト・ヴァーグナーに会うことが出来た。この会見は、既に熱烈なヴァーグネリアンであったアシルのために、特にメック夫人が取り計らってくれたものであるが、それは若いアシルにとって非常な喜びであった。名声雷の如く全欧羅巴に遍かったヴァーグナーは、当時のアシル・ドビュッシーにとって、さながら音楽の神様とも思われたのである。尤もドビュッシーは後年ヴァーグナーに対する意見を変えてはいるけれども……

ウィーンではハンス・リヒターの指揮による《トリスタンとイゾルデ》の上演を観ることが出来た。この総譜を彼はウィーンから持ち帰ったが、これをドビュッシーは長い間愛して止まなかったのである。

モスクワに於ける滞在は、作曲家としてのドビュッシーの上に、著しい影響を与えたということが出来るだろう。彼は初めて露西亜五人組、即ちバラキレフ、ボロディン、セザール・キューイ、リムスキー＝コルサコフ、ムソルグスキー等の音楽を聴いた。彼等の独自の音楽は、ドビュッシーを深く感銘せしめたのである。毎夜のようにドビュッシーはメック夫人のために、沢山の室内楽を演奏した。そして露西亜音楽の新しい音響と親しんだ。それはドビュッシーにとって、心から幸福な日日だった。

然しながらそれらの露西亜音楽にも増してドビュッシーを深く喜ばせたのは、ジプシーの音楽だった。彼等が自分で作曲する自由な音楽は、音楽に於けるそうした自由さに対するドビュッシーの生れつきの趣味を、一層^{あお}煽り立てるものであった。彼はモスクワのキャバレーや近郊で、屢々ジプシーの音楽家に接し、幾時間も^あ倦きず彼等の不思議な音楽に耳を傾けた。ジプシー音楽の^{ギリシヤ}希臘や東洋風の音階、独特の舞踏歌や民謡のメロディーは、ドビュッシーの耳に深く刻みこまれ、後年の彼の作曲の中に色色の形で姿を現しているのである。

モスクワから帰ると、ドビュッシーは再び音楽学校に通い始めた。デュランの和声科の外に、オーギュスト・バジルの伴奏科の講義も聞くことにした。バジルは余り有名ではなかったが立派な音楽家だったので、ここで聞いた一年間の講義は、ドビュッシーにとってかなり有益なものだった。そして彼は^{ブルミエ・アリ}一八八〇年の伴奏科コンクールでは友人のカイザーと共に第一賞を獲得することが出来た。

その後ドビュッシーはエルネスト・ギローの作曲科に入った。ギローは一八五九年の羅馬^{ローマ}賞獲得者であるが、ドビュッシーに

とっては教師というよりも寧ろ友人となった。色色の共通の趣味——美学や絵画に対する趣味、和声についての考え方、宵っ張りであること、撞球〔校註:玉突き〕、煙草……などが、先生と生徒を密接に結びつけたのである。先生の方では、普通一般の厳格な服従や学校的伝統を、無理遣い生徒に押しつけることの不可を理解した。そして余り束縛しないで、生徒の素晴らしい才能を開花させることに務めたのであった。

こうして音楽学校へ通っている間にも、ドビュッシーは自分で幾らか生活費を稼がねばならなかった。最初は子供達にピアノを教えていたが、後にはモロー＝サンティ夫人の歌の教室でピアノ伴奏をすることになった。このサンティ夫人に対して、ドビュッシーは一八八二年彼の最初の作曲である《星月夜》を捧げているが、ドビュッシーが女声合唱に興味を持つようになったのは、こうした事からであった。続いて彼はコンコルディア協会のピアノ伴奏者となった。これはシャルル・グノーを会長に戴き、シャルル＝マリー・ウィドールを指揮者とするアマチュアの合唱団である。シャルル・グノーはその頃光栄の絶頂にあったが、彼は若きアシル・ドビュッシーの天才を認めるに少しも躊躇しなかった。後年ドビュッシーが羅馬大賞を授与されたについては、グノーの力が大いに働いている。これについては後にまた述べるであろう。

ところでドビュッシーはモロー＝サンティ夫人の教室で、一人の婦人を知ったが、それは彼にある期間非常に重大な影響を与えたヴァニエ夫人であった。彼女は巴里の建築家の若くして美しい夫人で、鶯のように綺麗な優しい声を持っていた。彼女の歎美者たるドビュッシーは、彼女のために沢山の歌を書いたが、殊に一八八〇年から八五年にかけては、ヴァニエ家の熱心な常客であった。彼はそこで大勢の知識ある立派な人人と会って、知的にも物質的にも色色得るところがあった。

ヴァニエ夫人の娘のマルグリットは、この頃ドビュッシーの良い遊び相手であったが、後年その当時の思い出を「ルヴュ・

ミュージカル」誌に発表しているので、それを少しばかり次に引用しようと思う。

「十八歳のドビュッシーは、はっきりした顔立ちの若々しい大きな少年で、縮れた濃い黒髪を額に撫でつけていた。然し夜になって髪を解いたところは（その方がずっと良く似合ったのだが）、私の両親の言葉を借りれば、中世期のフィレンツェ人そっくりに見えた。彼の顔つきは大変興味があつたが、わけでも眼が人人の注意を惹きつけた。そこが人人に並の人物ではないことを感じさせた。彼の手は強くて骨張っており、指は太かった。ピアノの演奏振りは大変力強くて良い響きを立てたが、時には非常に柔らかに歌うように弾きもした……

「コンスタンチノーブル街五番地の小さなサロンの中にいる彼の姿を、私はいくらか朧気に想い出す。彼が五年間に作曲したものは、大抵その部屋で出来たのである。彼はそこへ殆ど毎晩のようにやって来た。午後のうちからやって来ることも度々あった。そして書きかけの原稿を、早速小さなテーブルの上に拡げるのだった。

「彼はピアノに向かって作曲した。それは変な形をした古いブロンデル・ピアノだった。歩き廻りながら作曲することもあった。彼は大変長い間即興曲を弾き、それから小声で歌いながら、部屋中を歩き廻るのだった。いつでも煙草を口に咥えているか、でなければ粉煙草を巻紙にくるむかしていた。そしていい考えが浮かぶと、すぐにそれを書きつけるのだった。彼は原稿を滅多に消さない代りに、書く前に頭の中やピアノで長い間苦心した。そして自分で書いたものには中々満足しなかった」

ドビュッシーの日常生活についても、もう少しマルグリットをして語らしめよう。

「ある日のこと、街の唄歌いたちが、家の前に止まった。すると彼は早速ピアノと歌で彼等に伴奏し始め、それから一同を家の中に招き入ると、長長い口上^{こうじょう}をいって一同に唄わせたが、その口上は私たちを腹を抱えて笑わせた。こんな風に時々彼はとても陽気になるのだけれども、すぐにまた悲しそうな、がっかりした様子に帰るのだった……

「雨の降る日など、時々みんなで骨牌^{こつぱい}〔校註:カルタ〕をして遊んだ。いつでもとても下手だった彼は、負けるとひどく機嫌が悪くなった……。そんな時には彼の機嫌を直すために、食卓につく時、そっと煙草の箱を彼のナプキンの下に忍ばせてやる。すると彼は忽ち^{たちま}元気になるのだった……

「彼はすべてのものについて、特殊なはっきりした趣味を持っていた。青い色が大変好きで、自分の持物の色彩を丹念に選択した。人から何か相談を持ちかけられると、とても嬉しそうだった。詩集を読むと、作曲すべき詩の選択について、長い間議論を闘わせた。その頃は楽しかった。私たちは彼を『アシル』と呼んでいたが、それを彼はこの上もなく変手^{へんて}古な名前だと考えていた」

実際この通りで、それから数年後には、ドビュッシーは一切アシルという名前を使わず、いつもクロード・ドビュッシーで済みましたのである。マルグリット・ヴァニエはなおも続ける。

「彼は大変に陰気、大変に敏感だった。極端なまで感じ易く、ほんの一寸^{ちよっと}したことで上機嫌にもなれば、不平たらたらで怒りっぽくもなるのだった。非常に野性的で、私の両親が大勢の人人を招待する時には、不満の色を露^{あらわ}に見せた。そんな時には彼はやってこなかった。知らない人人と一座するのが彼は厭^{いや}だったからである。

「然したまにそんな時やって来て、お客さんが彼の気に入ったとなると、彼は忽ち^{たちま}愛想がよくなって、ヴァーグナーの作

品や現代作曲家のものを演奏したり歌ったりした。然し気に入らないとなると、はっきりそれを態度に現すのだった。

「つまるところ、彼はオリジナルで幾らか人付合いの悪い青年だったが、自分の愛する人人という時は、全くチャーミングだった。

「大変に物を知らなかったが、それが自分で分からないほど呑気^{のんき}ではなかったので、夏の長い日中作曲も散歩も出来ないような時には、彼は沢山の本を読んだ。私の教科書の中から辞書を引っ張り出して、一生懸命に読んでいるのを、私は度度見かけた。それについて彼はこんな風にいった。『僕は辞書を読むのが大好きだ。色んな為になることが覚えられるからね』

「芸術品に対する鑑賞力は、彼の生れつきのものだった。油絵や版画に対して、その頃彼は少しも興味を持っていなかったけれども、それらについても彼の鑑賞は誤っていないかった。私の父は非常な芸術愛好家であったが、彼と芸術について話し合うと父は彼の言葉の中に、全然独自で注目すべき鑑賞と、極めて正鵠^{せいこく}な批判とを発見するのだった」

ドビュッシーはマルグリットにピアノを教えたこともある。それはどんな風に終わったか？

「この頃（メディチから帰ってから）彼は私の両親を喜ばせようとして、私にピアノと和声学を教え始めた。けれども何という悪い先生だったことだろう！ 少しも忍耐というものがなく、自分の前にいる若い娘に理解が行くように説明することなど、とても出来ないのだった。彼がすっかり喋^{しゃべ}ってしまわないうちに理解せねばならなかった。そんな訳で私たちは到頭^{とうとう}それを断念せねばならなかった……………」

さてマルグリット・ヴァニエの回想はこれで切り上げて、再

び音楽学校生としてのドビュッシーに還ろう。今やドビュッシーは羅馬大賞を目差して進みつつある。一八八二年の五月、彼は羅馬賞コンクールの予備試験を受けたが、通過しなかった。翌一八八三年には無事予備試験を通過、ポール・ヴィダル、シャルル＝ルネ、グザヴィエ・ルルー、エドモン・ミサ等と共に、羅馬賞を争うことになったが、然しこの年第一羅馬大賞を授与されたのはポール・ヴィダルで、ドビュッシーは第二大賞を与えられた。

ドビュッシーが今日広く知られている交響曲《放蕩息子》によって第一羅馬大賞を獲得したのは、一八八四年のことである。公開審査は六月二十七日に行われたが、この時の審査の様子は、人によって色々伝えられている。レオン・ヴァラスによれば、ドビュッシーの作品は非常な成功で、直ちに二十八票のうち二十二票で一等に推薦されたことになっているが、シャルル・ケックランの説はこうである。即ちそれはローズ・カロン夫人、ヴァン・ディーク、タスカン等の立派な歌手によって歌われたにも拘わらず、その独自性や様様の新しい和声的方法のために、危うく選に洩れるところであった。これを救ったのはひとえにシャルル・グノーの力である。グノーが極力これを支持したために、やっとドビュッシーは第一羅馬大賞を獲得することが出来たのであった。審査が終わってから、グノーは若いドビュッシーを抱いて次のように祝福したという。「おお君、君は天才を持っている！」

この挿話がどこまで真実であるか、いずれの説が正しいかは断言の限りではないが、少なくともドビュッシーが栄冠を授けられたについては、グノーやギローの力が大いに働いていることだけは真実のようである。ところでここに興味あるのは、この場合のドビュッシーの態度である。数度にわたる突撃の結果漸く本望を達したのであったにも拘わらず、羅馬大賞を獲得したことは、他で考える程ドビュッシーにとっては嬉しいことではなかったらしい。一体ドビュッシーはコンクール制度という

ものはかなり疑惑を抱いていて、後年屢々それに対する反感をあからさまに述べているが、一九〇三年四月六日の「ジル・ブラ」紙〔校註:Gil Blas〕上では、羅馬賞を受けた日の印象を次のように書いている。

彼はコンクールの会場から出ると、デ・ザール橋の上に立って、セヌ河上^{かじよう}を走る沢山の小舟を眺めながら、審査の結果を待っていた。

「私は冷静だった。余りにも羅馬的なあらゆる感動を、すっかり忘れてしまっていた。河水^{かすい}のうねりに戯れる綺麗な太陽の光がとても美しかった……。不意に誰かが私の肩を叩いて、声^{こゑ}を喘^はませながらいった。君は勝ったよ！と……。人が信じようと信じまいと、私ははっきりいうことが出来るが、私の歓喜は消えてしまった！ ほんのささやかな公式称号^{もたら}が齎^{わづら}す様な患いや苦勞を、私は明らかに見た。そればかりでなく、私は自分がもはや自由でないのを感じた……」

「様な患いや苦勞」というのが何であるにしても、ドビュッシーが一番辛かったのは、懐かしいヴァニエ家の人人と分かれて羅馬へ行かなければならなかったことであつたらしい。友人たち、わけでも「メロディーの精」とまで彼が歎美して止まなかったヴァニエ夫人と一緒にいるために、彼は何度羅馬留学を中止しようと思ったか知れなかった。だが彼は矢張り羅馬へ行かなければならない。そして新しい生活に入らなければならない。

底本と校正について

底本 『ドビュッシー』
著者 こまつこうすけ 小松耕輔 (1884-1966)
発行所 共益商社書店
発行年 昭和十三年七月二十八日 (1938年 7月 28日)
備考 ※「楽聖伝記叢書」第十二篇
※国立国会図書館デジタルコレクション書誌 ID=000000707848
※イラスト複製は訳者蔵書からのレタッチによる
※縦書き、右綴じ

資料① 『Claude Debussy et son temps』
著者 Léon Vallas レオン・ヴァラス (1879-1956)
発行所 Librairie Félix Alcan (フランス、パリ)
発行年 1932年

資料② 『フランス・ピアノ音楽 1』
著者 Alfred Denis Cortot アルフレッド・コルトー (1879-1956)
訳者 やすかわさだ お 安川定男 (1919-2007)、やすかわ か ず こ 安川加壽子 (1922-1996)
発行所 音楽之友社、ISBN4-276-13166-9、3200円
発行年 1995年 4月 20日
備考 ①ドビュッシーは1920年12月1日号『La Revue Musicale』誌所収
②英訳あり『The Piano Music of Claude Debussy』、Violet Edgell 訳、
J. & W. Chester Ltd.、1922年

○本書では底本の体裁である旧漢字旧仮名遣いという様子を踏襲していない。また送り仮名はすべて現代的なものに従って処理した。資料本は、底本の校正の

ために文章と資料を参考にした。なお、末尾の人名索引は編者が追加した。

- 校正にあたっては広辞苑第六巻を参考としたが、見出し語にない言葉が著者の造語筆癖か、誤植なのか当時の習慣であったかについて判然としないものがある。それらは底本通りとしたが、特に気がついたものを次に列挙しておく。中国語からの外来語と思われるものも含まれる。

年老った、偉れた、底い、甘柔な、焦立たせた、喘ませ、変手古、焦ら焦ら、蔵って、凝視めて、悪企み、お終い、八釜しく、顕出、雅美、粗剛な、外袍、刷筆、初生初生しさ、凋れる、樹立、眼眸、間諜つく、簇葉、絶気する、冗戯

- 読者の便と可読性も考慮して編者が適宜ルビを振った部分がある。曲名以外のルビは底本通り親字に残しておいた。
- 文中のフランス語による人名・地名・曲名・楽典用語についてはなるべく底本通りとしたが、それ以外の言語由来や楽器名は辞書や一般的な綴りと思われる音写とした。
- 文中の楽典用語や楽器名については、英語発音とフランス語発音からの音写が混在しているが、楽器名については現在は英語で使われることが多いと判断して一般的と思われる音写に従った。曲種や作曲に関する用語についてはなるべく底本通りフランス語音写のままとした。
- 作品目録の曲名については、現代の文献や録音物の資料などで綴りに微妙な違いが見られるが概ね底本通りとした。同様な理由から「潭詩曲」＝バラード、「狂詩曲」＝ラプソディー、「奏鳴曲」＝ソナタ、「小詠唱」＝アリエット等についても本文中は底本通りとした。曲名に類似のものが多くために混乱が生じよう、作品目録にはルシュール氏(François Lesure)作成の「L番号」(L1からL150)を添えた。また、本文では和名の曲名にはカタカナルビでフランス語のタイトルが添えられているが作品目録で完備されているため、読み易いよう曲名のルビはすべて略した。
- 作曲年の扱いが現代的な資料と大幅に違うものが散見されるが、本文の記述に食い違いが生じ、また正確な時代考証やそれらの裏付けなどは専門家の研究と文献に譲るべきものと判断して、本文中では一切手をつけずに底本通りとした。なお、本文で触れながら作品目録にリストアップされていない曲が若干あったため、それらは編者が補った。
- イラストは基本的に底本に従っているが、一部の肖像画、ドローイング、楽譜、手紙は割愛した。掲載した写真にはオリジナルから大幅にトリミングされているものが混じっているが、基本的に底本または資料のトリミングをほぼそのまま踏襲した。
- 初版 ISBN978-4-908795-02-2との差分点は、大幅なイラスト省略と、若干の誤字・註釈の追加訂正およびルビ追加である。
- テキスト校正上の自明な誤植等については特に注記せず直したが、浅学な編者の力不足から間違いが混入した可能性もあるため、お気づきの点のご指導頂けると幸いである。

————— フェゼの既刊書より —————
ドビュッシーを巡るテキスト

① 『大鴉から抒情的散文へ —資料集—』

2015年 松下健治訳著

ソフトカバー223頁、A5版(21×15×1cm)、英仏文対訳

ドビュッシーの歌曲「抒情的散文」に至る英仏文学作品をさぐる試み。

巻末に『Serres Chaudes』と『Pierrot Lunaire』のテキストを収録。

初版発行 2015年5月

ISBN978-4-9906922-5-4

② 『ペレアスとメリザンド —対訳版—』

1892年 モーリス・メーテルリンク作 島村抱月・正宗白鳥訳

ソフトカバー235頁、A5版(21×15×1.5cm)、新字新仮名

ローレンス・アルマ・タデマの英訳との三対訳による比較研究資料。

初版発行 2015年7月

ISBN978-4-9906922-7-8

③ 『楽聖ドビュッシー』

1938年 小松耕輔著

ソフトカバー214頁、A5版(21×15×1cm)、新字新仮名

ドビュッシーの全生涯から、人となりとその作品を網羅して詳解。

初版発行 2017年7月

ISBN978-4-908795-02-2

がくせい
楽聖ドビュッシー

DEBUSSY

発行日	2020年9月13日 改訂オンデマンド版 2017年7月15日 初版	Revised Edition First Revision
発行者	フュゼ	FUSÉE
発行所	434-0031 浜松市浜北区小林450-1	Hamamatsu
著者	小松 耕輔	KOMATSU Kousuke
編者	松下 健治	MATSUSHITA Kenji
印刷製本	株式会社ブックフロント 176-0012 東京都練馬区豊玉北6-13-3 上野ビル4F	

FUSÉE <http://www.cam.hi-ho.ne.jp/kenjim2/>
©2020 MATSUSHITA Kenji, all rights reserved. Printed in Japan.
ISBN978-4-908795-06-0 C0073 Print on Demand
